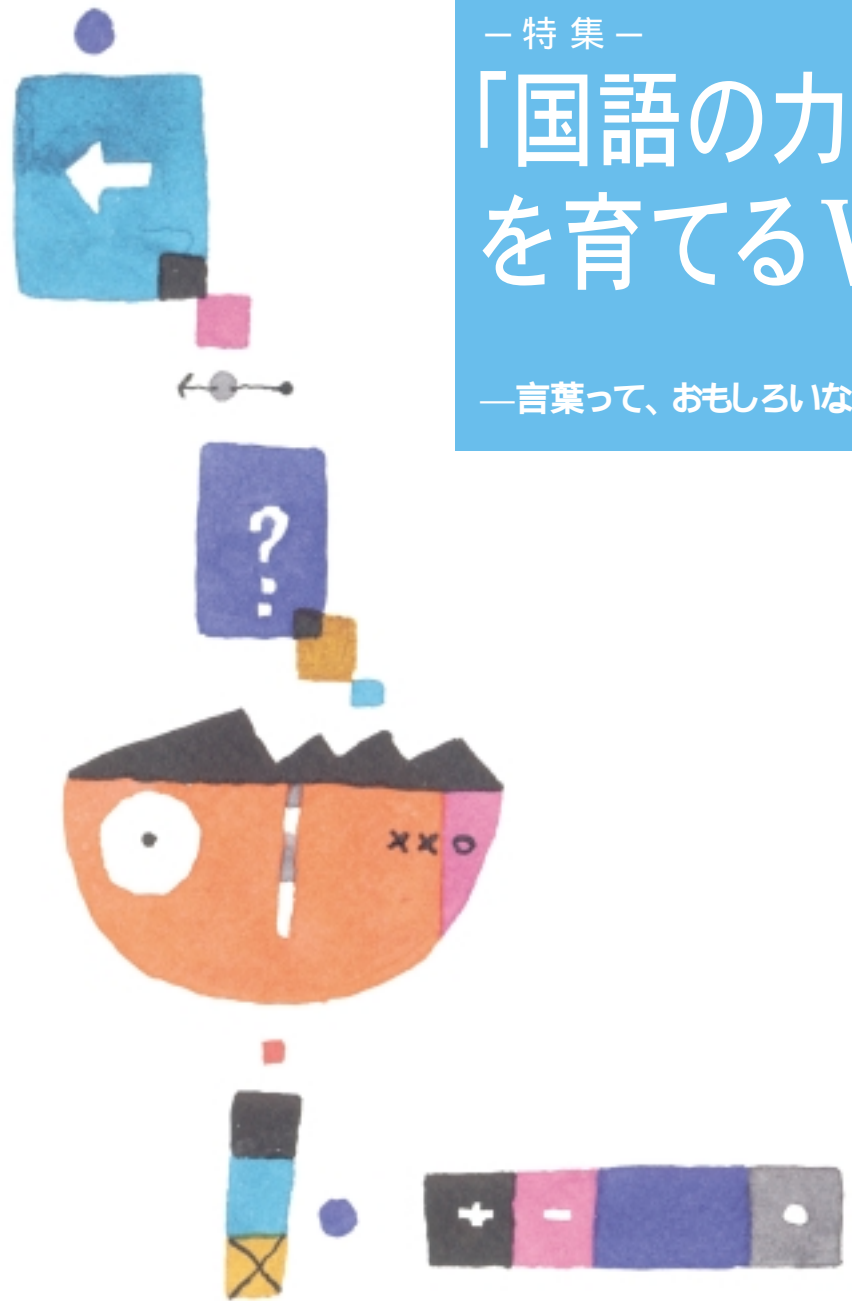




—特集—

「国語の力」 を育てるV

—言葉って、おもしろいな—

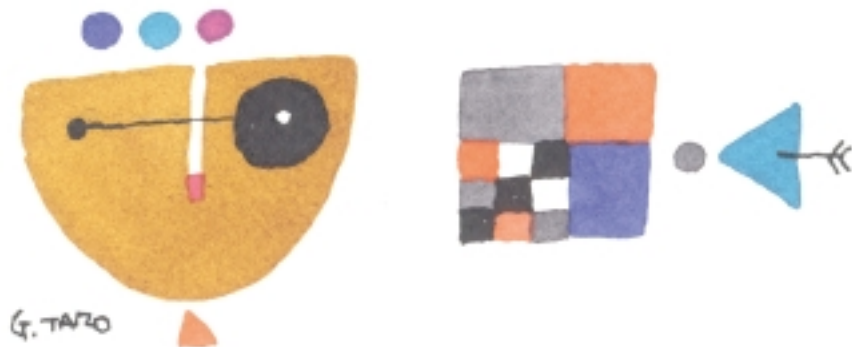


いっしょがいい

絵本作家 五味 太郎
ごみ たろう

「いっしょには「は」「は」「は」と書くのだけれど、「わ」と読むのさ。「は」なのだけれど「は」じゃないの。「わ」なの。「学校へ行きます」「の」「へ」「は」「へ」と書くのだけれど「へ」「へ」「へ」じゃないのよ。「え」なの。でも「学校へ行きます」と書いたらダメなの。間違いのさ。×なのよ。あくまでも「学校へ行きます」なのね。分かった？」

分かんねえよ、というのが正直なところだな。分かんねえから、なんでそうなるのですかと質問したいところだけれど、質問してはいけないのさ。質問しても仕方ないのよ。だって先生の99%はその訳を知らないんだもの。まあ1%ぐらいの奇特定の先生が、運良く誰かに聞いたか、あるいは立派に学習したかして、昔々の日本語の名残りとして「は」でもなく「わ」でもない、その中間みたいな音がかつてあってね。でも残念ながらその字がないので仕方なく「は」あるいは「へ」と書くことにしたのさ、という正解を知っている（今、ここではじめて知った人もある訳で、これで奇特定の先生が1.3%ぐらいに増えたということね。この文章もムダじゃないのさ。）というべらうの世の中なのさ。でも現場というところでは「いっしょには「は」「は」「は」と書きます。「学校へ」「学校へ」と書きます。そういうことになっています。分かりましたね。では次へ、では次へ、では次へ行きます。という具合にとどこおりに進んでゆくわけです。形はまだ小さいけれど、性能はまだなかなか良い頭脳というやつを持っている幼い連中は、なかなか腑に落ちないなあと思いがちながらも、まあ、基本的に単純ですからそのまま次へ



もなく「知らん。」と言った父親がいいなと思いました。

翌朝、朝食の上にメモが置いてありました。「gonna 't be going to」の米語、つまりスラングということだそうだ。」

夜、仕事のついでに調べてくれたらしい。へえ、なるほど。確かに父親は英語人であつても米語人じゃない。正統派英語学の人がテキサスがカンザスか知らないけれど、米語のそれもカントリーソングのスラングなんぞ知ってる訳ないのね、うん当然だ、ということです。そのぶっきらぼうなメモの調子に、父親の英語人としての意地と、一応専門家としての自負のようなものが読み取れて、ばくはすごくすごく嬉しかった。

いっしょがいいな、と思います。親も子も先生も生徒もない、大人も子どももない、同じ地平に生きている人同士として、疑問や謎や不合理や、あるいは正解や答えや合理を共有してゆく、そんな気分がいいなと思います。「は」「は」「は」であつても「わ」「なんだなあ、ちょっと変だよな。でもそこにはある理由がある訳だから、」「わ」と書いても×じゃないけれど、「は」と書いて「わ」と読むというルールでやったほうがいいのかもね、ぐらゐの余裕はあつていいと思います。その共有性と余裕があれば、多くの事柄はそれなりに腑に落ちて、それこそ次へ行く何らかのエネルギーになつてゆくのではないか、そんな気がします。

五味太郎（ごみたろう）

一九四五年生まれ。工業デザイン、グラフィックデザインの世界から絵本を中心とした創作活動に入り、コトクな作品を多数発表。その著書は『はたらくた』さんぼのしるし（福音館書店）、『言葉図鑑』（全十巻×信成社）など三百冊以上に及ぶ。その独創的な作風は、子どもから大人まで幅広いファンをもち、数十冊の絵本が海外でも翻訳されている。現在は、エッセイ、服飾デザイン、アニメーションビデオ製作など、さまざまな分野で活躍している。

行く訳です。行くよりほかはないのです。それが現場というものです。そして腑に落ちないまま算数をやって理科をやって体育をやります。やらされます。ある程度はそのまま分かりますし、少し努力すればかなりできます。でも腑には落ちません。何かしっくりきません。ですから全般的にお勉強はそう面白くありません。そして辛くなつたりもします。そして例えば少し生まれつき理屈っぽいガキがいて、「なんで勉強するんですか。」なんて根本的な質問を發したとします。答えは簡単。いつものとおり、「子どもは勉強することになつてゐるんだ。」というやつです。「は」「や」「へ」のときとまったく同じです。つまり先生も親もその根本は分からないのです。まさに、そういうことになつてゐるからそういうことなんだ、といったレベルの理解なのです。腑に落ちる訳はありません。

中学二年生ぐらいのときでした。友達とカントリーソングのバンドを作つて、英語の歌のようなものをけつこういい加減に唱つていました。英語も習いたての時期ですからなんとなくカッコをつけていたのでしょう。レコード演奏と付属の歌詞カードを参考に、「コピーする訳です。でも何はともあれ英語です。知らない単語がいっぱいです。辞書を引きます。見上げた学習態度です。」

ある時 gonna という単語にぶつかりました。ばくの辞書には出ていません。そこで父親に聞きました。父親は大学の英語科の教授です。それがこともあつたに「そんな単語知らん。」と言つたのです。びっくりしました。愕然としました。父親の根本的実力をちよつと疑いました。と同時に英語の教授でも知らない単語があるものなのだと知つて、なぜか少し楽しい気分にもなりました。そりやそうだよな。英語の単語なんて限りなくあるハズなのだから、知らないのがあつたつて不思議はないよね。なんて感じてした。そしてそれ以上に、なんの躊躇